

末黒野

すぐろの

6月号
(通巻886号)



庭桜

火の散華包みて帰るお水取
浜小屋の雛一對新しき
桃の日や貝の口開く夕厨
黄水仙昼なほ暗き海へ向く
寺へ行くまつすぐの道かぎろへる
ふらここの下揺れてをり水溜り
昼月の薄れ木蓮空に満つ
春風や鳩は卯建に人は野に
はじめての雨に濡れたる桜かな
ことさらに夜は白くあり庭桜
観音の千手止めえぬ花ふぶき
笑ひ顔泣くとも見えてかぎろへる

黒滝志麻子
(主宰)

鳥雲に

社業林の鳥の饒舌梅二月
梅の園雨に色濃き敷瓦
日溜りより日溜りへ行く梅見かな
末黒野や息吹うながす雨意の風
木の芽雨厚き歳時記膝に置き
雉鳩の頭びよこびよこ花董
幼より受くるすそわけ雛あられ
啓蟄や子らの屈めるひとところ
小綬鶏や早う醒めよとひとしきり
大池の杭影揺れず鳥雲に
名刹の篁を梳き風光る
仰ぎ見る汐汲坂の初音かな

森清堯
(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

梅真白

石黒興平

春宵や路地の賑はふ神楽坂
暮れなづむ路地のたんぽぽ踏むまじく
酔漢と擦れ違ふ路地朧月
竹林に隣る梅林人寄せて
門を守る紅白梅の二幹かな
形よく剪られし梅の盛りかな
見るからに手入の届き梅真白
百年の菓子舗やつるし雛飾り
野仏のアルミ貨ひかり犬ふぐり
ウイルスの影や春眠浅きまま

浮氷

岡野里子

弁天の吐息か揺るる春の燭
老木の見得切る力臥竜梅
梅が香や笥の水の音走り
老幹の添木の根方路の臺
林泉の添木鮮らし臥竜梅
雨の公園ぶらんこは風が乗り
風たてば風に委ねて浮氷
ブルースの流るる歌碑や幣辛夷
春一や鏝音回る風見鶏
夕闇の白き炎や花辛夷



遠霞

菅野日出子

昼席を出でて上野の春夕べ
池の端の骨董市や春灯
紅梅を活けて上野の鰻処
鰻屋の上り構の享保雛
竹林に日矢の一条雀の子
百幹の竹の囲める閻魔堂
疎に密に丘を点せり黄水仙
河川敷に球児の声や青き踏む
多摩川の蛇行はるかや遠霞
クレソンや小鷺の足のうす緑

花

田中臥石

老いてゆくところへ喝と合歡花芽
膝痛の破行の影や日脚伸び
梅花捧ぐ津波死姉の大祥忌
吟行は中止なりけり梅真白
紅梅の匂ふ智恵子の屋敷跡
光太郎の詩碑の連翹明かりかな
八鶴の地巡りけり花の雲
酒欲しき眼をして眺む遠桜
ふらここに揺られ地球を離れけり
マスクして会釈は誰ぞ夕桜

わかさぎ

森清信子

湯上りの頬染むる稚雛飾
わかさぎの糸ぴちぴちと釣られけり
黙りを通す雨の日古雛
啓蟄やふつくら返す卵焼
書肆に選るたつた一冊木の芽晴
雨弾きくれない宿す牡丹の芽
総身の耳となりたる初音かな
白波の白波を呑み春疾風
石庭に開く心や風光る
青空の奥の青空百千鳥

乙矢集

配列は音順(当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ)



風光る 大川暉美

たちまちに雨に消えけり薄氷
ダランドに飛び交ふ声や風光る
寿浅し山並みの彩整はず
力秘め天へ辛夷の蕾立つ
薯植うや畑に馴染めと土と水
江ノ電の窓より春の光かな
春潮の洗ふ岬や鳶の笛



桜東風 岡田史女

その裾に野点の傘や枝垂梅
琅玕の筧や競ふ春の水
東日本震災忌なり蝶生る
指櫛で梳く髪白し桜東風
彼岸中日家中に風通しけり
海へ向く乙女の像や初桜
新築の市民病院風光る

學の字 小田嶋野笛

罷り出づる雛の顔つくづくと
濁音符つくるごとくに木々芽吹く
沈丁や基地に北門東門
忘却は葉や梅の散り初めて
とつぷりと瑞香深き闇の底
學の文字残る校門花ふふむ
一粒のチョコや春眠断つ決意

マスク

加藤静江

名利の僧の外さぬマスクかな
浮舟をかすかに揺らし春の鴨
山門の威厳やはらぐ枝垂梅
あたたかや御堂鎮むる摩尼車
海坂の空に解け合ふ遠霞
うららかなや眼下鎮もる相模湾
青銅の大屋根の反り枝垂梅

菜の花

齊藤マキ子

啓蟄や琥珀の中の虫の翅
囀や同じ木にくる同じ鳥
花粉症玻璃一枚の内と外
老いてなほ道草楽しつくしんぼ
かつて日々歩みし町や月おぼろ
卒業の子らに囲まれバスを待つ
菜の花や乗りこんで待つ村のバス

春は来ぬ

堺 昌子

山葵田の水のきよらや風あまし
鳶飛ぶ水仙の群山間に
河津川菜の花ゆらす風かるき
土手染めてたんぼの黄や水車小屋
菜の花やひいふうみいと下校生
道祖神犬連れの娘へ花の風
群青の空ふんはりと春の鳶

初音

高木邦雄

日本海望む棚田の露の臺
街路樹や根締めはなやぐ遊蝶花
潮匂ふフランス山の初音かな
隠沼の岸辺明るし花こぶし
老松や桜隠しの綿かぶり
朝風や木五倍子の花の揺れ止まず
春風に背を反り伸ばす朝かな

春動く

今村千年

をちこちに膨らむ気配路の臺
野も山も疾風のごとし春動く
春乗するメリケン波止場旅客船
広重の波寄せてをり春の岸
舫ひ舟軋みてをりぬ春一番
苜蓿瑞穂の国の休耕田
頬白や風に馴染みて藪のなか

蝌蚪の紐

及川照予

草餅や遠き昔の母の味
壺焼きの香りもれ来る暖簾かな
秀吉の奢り果てなし利休の忌
蒼天へ青き微笑み犬ふぐり
さざ波に目覚め初めたり葦の角
名のゆかし太郎冠者てふ椿かな
木もれ日の水にふくらみ蝌蚪の紐



青炎集

黒滝志麻子選



横浜 太田良一
軍港の深さは知らず花曇
踏む音の変はる結界花の屑
捨畑の増ゆる裏山風光る
子雀やとんとん飛んで化粧坂
鶯の尖る関所や切通し
先客となりたる茶店花疲れ

横浜 前原マチ
古民家の裏の小流れ露のたう
金色の寝釈迦拝むよき日かな
少年の喇叭の復習春の野辺
玻璃越しの梅の真白や蕎麦処
雛数多飾る旧家や立子の忌
黄身のごとき春満月やポストまで

横浜 山咲和雄
マスクしてマスクの人の波となる
手入れせぬ庭にも春はきてあたり
新型のウイルス飛ばせ春一番
雑草てふ名の草の無し名草の芽
宿下駄で歩く浜辺や春夕焼
山葵田の景色となりぬ水の音

東大和 谷口律子
フラメンコの高鳴るタップ猫の恋
曲がり角飛び込んでくるミモザの黄
カリヨンの響く夕べや花ミモザ
雛の灯や眉なき官女ひとり居て
啓蟄の虫を目で追ふ待ち時間
月おぼる崩れかけたる築地塀

横浜 有賀鈴乃
仁王像の眼の光り冴返る
夕映ゆる海苔浜帰帆続きをり
新海苔ののぼりに日の香潮の香
のぼり初む春満月を追うて帰路
傍へ積まるる書籍春炬燵
春眠や憂き世はなるる小半時

川崎 滋野 暁
オリオンの右肩幽し夜の更けて
春めくや背を上下する妣の麻姑
青饅や波郷を語り酒かたり
酌み交はす肴は鮓掛の黒眼張
のら猫に出合ふ猫の日春一番
開かれたる貝に小さき紙ひいな

横浜 長尾タイ
半仙戯夕日蹴り上げ反抗期
青年の白き腕や畑を打つ
路の薑呆けて尺の背くらべ
うら若き畳職人春炉閉つ
埴輪の目口鼻まろく春愁ふ
燕の巢補修の泥の黒黒と

横浜 峰 幸子
ブティックの新装なるや花ミモザ
春キャベツ刻む俎板へこみあて
春の雲ドッジボールの子等の声
休校の子等はゲームや雛の間
淡雪や中止となりぬコンサート
古民家の大八車濃山吹

横浜 両角富貴
裏山の季の移ろひや初音きく
目刺焼く匂ひも馳走独り膳
土筆摘みし空地に家や風堅き
啓蟄やウイルス恐れ身を縮め
読みさしの本にうたたね春日より
亀鳴くや遠景の海風きてをり

大 網 白 里
行きずりの人と余寒を言ひ交はず
梅東風や古刹に至る切通し
修復の槌音ひびく梅の寺
捨猫のいつか棲みつき木瓜め花
永き日の猫も駆け寄る宅急便
春光をふふみて軍手よく動き

耕 土 集

森清 堯選

春疾風我が白髪の天を衝き

横浜 滝口 洋子

右も左も春のマスクの車内かな

会中止の空白の日や春嵐

蛤の椀に三つや香り満ち

足場用の黒きネットや朧月

緋毛氈ひろぐる仏間雛の間

横浜 小原 紀子

立纓をたかだかとせる男雛かな

すべらかしのみだれを直し雛飾る

雛菓子や雛に仏にひとつづつ

雪洞の花柄の透け雛の夜

日溜りのトランプ遊びうららけし

横浜 平田 きみ

宙を舞ふ竿の干し物春一番

掃除終へ初音聞ゆとラジオより

うららかや写真の母に語りかけ

桜の芽昨夜の雫の光る粒

雲一朵一樹に二つ置く古巢

横浜 伊藤 美緒

木の橋に並ぶ釣人水温む

見舞ひ終へたもとほる町囀れる

代経たる屋敷の跡や草青む

蒲公英や毅然と歩くレトリバー

潤うて光りほぐるる物芽かな

横浜 白居 澄子

ひな祭姉妹そろひの耳飾り

川風にこぼれつぎたり雪柳

啓蟄やバッグをねだる孫七歳

雲行きの忽と変はるや春の雪

髮梳きて整ひにけり古雛

横浜 秋山 文子

庭石へ落とす錆色白椿

春の雷夫の言葉の常ならむ

陽光を返す花びら白木蓮

春の風木々の梢の色づきて

木の芽吹く蠶の糠床復活し

横浜 中里 昌江

使ひ捨ての手拭き必携二月尽

春の夜や衿立て直しコンビ二へ

風光る用を作りて一万歩

朝一の五分体操春の風